

平成31年度  
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
 成果報告書

団 体 名	株式会社地域文化創造	
施 設 名	茅野市民館	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内定額(総額)	1,051	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	1,051	(千円)





(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	茅野市民館をサポートしませんか 2019	8月12日、9月14日、 3月27日(中止)	①「舞台「カチカチ山」ができるまで」 講師：辻野隆之(茅野市民館ディレクター) ②「てとてでおはなししよう」講師：善岡修(俳優、人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」代表) ③「演劇の『種』育てましょ！ 発芽をうながします ～カラダもほぐしココロもほぐす、まぜこぜアート・クリエーション～」講師：柏木陽(NPO法人演劇百貨店代表/演劇家) ※中止	目標値	128名
		茅野市民館マルチホール、アトリエ、コンサートホール		実績値	60名
2	茅野市民館 みんなの劇場(茅野市小学4年生招待公演 + 一般公演)	10月4日、10月5日	④「はこ / BOXES じいちゃんのオルゴール♪」小学4年生招待公演 ⑤「はこ / BOXES じいちゃんのオルゴール♪」一般公演 出演：デフ・パペットシアター・ひとみ	目標値	669名
		茅野市民館マルチホール		実績値	610名
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>地域文化の創造に挑戦する茅野市民館は、集う一人ひとりの「気づき～想像～創造」サイクルを、「生」の触れ合いによって体感する、なんびとにも開かれた、新たな生涯学習の「ひろば」である。多くの市民が、プレイヤーとなって、プレゼンテーションし、コミュニケーションする機会を公共として保障していくことが社会的な役割と考える。</p> <p>茅野市は八ヶ岳連峰の西麓にあり、蓼科高原をはじめとする美しい自然に恵まれている。茅野市の歴史は古く縄文時代までさかのぼり、近代以降も、文化人の集まる「蓼科」という別荘地も形成されている。また、市の取組みとしては、公民協働の「パートナーシップのまちづくり」の理念と手法でまちづくりを進めている。茅野市民館では、その活動を支えるサポーターが活躍している。</p> <p>茅野市民館は、市民の主体的な参画と文化的自立をすること、地域の文化創造を担う市民の層を広げていくこと、地域の文化的拠点として機能し愛される「劇場・音楽堂」として存在しつづけることを目指し、普及啓発事業では2つの事業を行った。1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」では、これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手のスキルアップと、これまで劇場に関わりのなかった人々を新たに招き入れ、協働しての創作に取り組み、劇場と地域の関わりをさらに広げる事業として進行することができた。2「みんなの劇場」（茅野市小学4年生招待公演＋一般公演）では、優れた演劇に触れる機会を届け、幅広い世代が「劇場・音楽堂」を身近に感じ、楽しむきっかけとなることを目指し取り組んだ。なお、各事業の参加者数、サポーター登録の推移、茅野市小学4年生招待公演における累計鑑賞者数も指標とし、進めることができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>茅野市の取組みとして、公民協働の「パートナーシップのまちづくり」の理念と手法でまちづくりを進めている。茅野市民館では、その活動を支えるサポーターが活躍している。サポーターが継続して学び、発信していく環境への期待があり、さらに新たなサポーターが生まれる環境をつくっていく必要がある。そして、既に劇場と関わりのある市民に加え、劇場と関わりの薄い市民（子どもや障がい者、外国出身者を含む）へのアプローチ、そしてそれを迎える劇場スタッフ・サポーターのコミュニケーション能力が必要である。</p> <p>この状況をふまえ、普及啓発事業を行うにあたり目標を設定した。「企画制作や表現活動を主体的に行う市民の育成」、「劇場スタッフのコミュニケーション能力の向上を目指す」、「劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐ」、「創造活動の魅力を伝える」、「新たな市民層が文化芸術活動に参加する機会とする」である。</p> <p>これらの目標をふまえ、普及啓発事業を進めた。1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」は、1つの初心者向け講座、2つのステップアップ・ワークショップで構成されている。これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手と、これまで劇場に関わりのなかった人々、そして講師らとの交流の場を様々な切り口で設け、企画制作や表現活動、創造活動に触れる活動にもなった。</p> <p>また、2「みんなの劇場」では、人形劇団のアーティストにより優れた演劇を届けられた。劇場を核とした、これらの市民の交流や文化芸術の発信は文化の創造につながっており、またこれらの活動は、新たな需要や高い付加価値を生み出し、質の高い経済活動につながっていくと考えられる。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

普及啓発事業は、1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」は①～③、2「みんなの劇場」は④⑤で構成し5つの目標を掲げた。

「劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐ」は①④⑤が対応するが、子どもから大人まで様々な層の参加者があり、劇場文化に繋ぐアプローチができた。「創造活動の魅力を伝える」は①②④⑤が対応するが、表現や感じることを講座、ワークショップ、公演により提供できた。「新たな市民層が文化芸術活動に参加する機会とする」は②が対応するが、はじめての参加者も多くあり、遊び、そして体感しながら、文化芸術活動に参加する機会を提供できた。「企画制作や表現活動を主体的に行う市民の育成」は①③が対応するが、劇場空間の変化を体感する機会や、ワークショップにより「人と意思を伝え合うときに大切なこと」を体験する機会を提供し、市民の育成につなげることができた。「市民をサポートする劇場スタッフのコミュニケーション能力の向上を目指す」は⑤が対応するが、公演の準備の中で、バリアフリーについて学び、コミュニケーション能力の向上につなげることができた。

以上、本事業を目標に対し有効に進めることができた。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

普及啓発事業は、1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」は①～③の3つの事業、2「みんなの劇場」は④⑤の2つの事業で構成されている。

①～③はワークショップと講座の事業、④⑤は鑑賞事業であった。

事業回数（事業期間）でこれらの事業をみると、①～⑤は、全て各1回であったが、新たな市民層の参加や交流のきっかけづくりや、文化芸術の発信の機会であったことからこちらも適切な回数であったと考える。また、事業回数の変更もなく、1回程度の増減であったことから、当初の計画通りに進んだと言える。

次に、事業費については、当初の計画通りから変更があった。収入における入場料等収入も予算想定から減額となった。収入減であったことから、事業を進めていく中で、舞台費や宣伝費を中心に支出をできるだけ抑えるように努めた。支出減額の中でも、出演費や謝金については、必要な金額をあてることにより、事業内容の質が落ちないように対応したが、最終的に新型コロナウイルス感染拡大防止により③を中止としたため、事業費は大きく減額となった。しかし、①②④⑤については、当初の計画通りの事業をアウトプットすることができた。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

茅野市民館は、管理運営において、実演芸術の特性である「表現者と鑑賞者の直接的コミュニケーション」を重視し、事業対象の年齢層や興味を注視した企画・制作を実施するとともに、鑑賞事業のみならず、より深い理解や感動を得るための体験的ワークショップ事業を組み込む。そして、市民の主体的な参画、文化的自立を目指し、地域の文化創造を担う市民の層を広げ、茅野市民館が市民の生涯学習や地域文化創造の交流拠点として機能し、愛される「劇場・音楽堂」として存在しつづけることを目指す。

1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」は①～③で構成される。①は初心者向け講座、②③はステップアップ・ワークショップとした。①では茅野市民館の劇場空間を紹介し、“劇的”な時空間が生まれるプロセスを体験し、劇場での舞台づくりを体感する第一歩とすることを目指した。②では地域文化の未来を担う子どもから大人まで幅広い市民を対象に、ろう者の人形劇俳優・善岡修氏を講師に迎え、「人と意思を伝え合うときに大切なこと」を、体を使った遊びを通して体験を提供した。③幅広い層を対象とした、心と身体を解きほぐすワークショップを通じて、表現の楽しさと、コミュニケーションの活性化を図ることを想定した。

2「みんなの劇場」は④⑤で構成される。④茅野市小学4年生招待公演、⑤一般公演として、人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」による『はこ／BOXES じいちゃんのオルゴール♪』を上演した。④は学校教育現場と連携して継続実施している企画でもあり、令和元年度で8年目となった。市内に9つの小学校があり、茅野市民館が近い距離にある学校と遠い距離にある学校とでは、児童が芸術文化に触れる機会の差が生じる。演劇鑑賞、劇場に足を運ぶことが、生活環境に関わらず、地域全体として日常的になる機会やシステムを増やす必要がある。劇場という同一空間に同学年の児童が集い、公演鑑賞を通じて得た感情を共有することで、文化芸術を愛する心を育むことを目指した。⑤では一般公演を上演した。日本で唯一、ろう者（耳のきこえない人）と聴者（きこえる人）が協同で創造活動をしている人形劇団による人形劇を、手話による事前事後のアナウンス、公演終了後の手話通訳と要約筆記を交えた質問コーナーを設け、様々な人々が劇場空間を体感する機会を設けた。

以上のように、良質な鑑賞事業や、様々なワークショップ・講座の中での創作や表現、学びの機会の提供、新たな市民層へのアプローチ、さらにバリアフリーと多言語への対応を行った。茅野市民館は、2つの普及啓発事業により地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮できたと考える。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

茅野市民館では「市民一人ひとりが主人公になれる場」を理念に、平成 17 年の開館以来、市民が主体的に地域文化・芸術の創造に取り組む体験型の研修プログラムを継続実施してきた。個性を受け容れ共感とともに創造する体験を積み重ねてきた成果として、地域文化活動の担い手が生まれ、演劇（おでかけ隊）やダンス（縄文おどり部）といった表現を、市民自らが劇場から地域に出向いて広める活動が始まっている。より多様な地域住民へ劇場文化の門戸を開くためには、様々な条件やニーズに合わせた表現の多様化や、質の向上が課題であり、文化・芸術に関連した様々な知識や技術を習得する機会が必要である。茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造は、代表取締役社長（茅野市民館ディレクター）および取締役のもと、総務部、技術部、事業部の体制で、技術・人材・情報等の資源を投入し、事業を進め、また市民の活動を支えている。

茅野市民館で開催する事業は、広く事業提案を募集し、事業に盛り込んでいる。令和元年度事業は、平成 30 年 2～3 月に募集を行い、58 件のアイデアが寄せられた。茅野市民館スタッフからの提案も行なったが、その多くが市民からの提案であり、平成 30 年 5 月に行なわれた「茅野市民館 よりあい劇場 2018→2019」において提案者による公開のプレゼンテーションが行われた。平成 30 年度に市民を含む会議の中で内容を検討し、茅野市民館指定管理者 株式会社地域文化創造の取締役会で令和元年事業の決定がされた。

1「茅野市民館をサポートしませんか 2019」の①初心者向け講座「舞台「カチカチ山」ができるまで」は、茅野市民館マルチホールの舞台が何もない状態から、空間をつくり、音響、照明を仕込み、舞台作品ができるまでの流れを丁寧に見せることで、劇場の面白さを体感する機会とした。さらに、参加者同士、さらにスタッフと、舞台技術への質問や作品の感想を共有する機会とした。②ステップアップ・ワークショップ「てとてでおはなししよう」は、ろう者の人形劇俳優・善岡修氏を講師に迎え、「見る」、「受けとる」、「伝える」、「補助しあう」など、意思を伝える方法の一つではないことを体感し、コミュニケーションで大切にしたいことを考える機会とした。

③「演劇の『種』育てましょ！ 発芽をうながします ～カラダもほぐしココロもほぐす、まぜこぜアート・クリエイション～」は、新型コロナウイルスの影響で中止となってしまったが、幅広い層を対象とし、表現の楽しさとコミュニケーションの活性化を図ることを目指し企画した。①②ともに、これまでの事業で生まれた市民サポーターが、新たな市民層の文化芸術活動を支える事業とすることができた。

2「みんなの劇場」は④茅野市小学 4 年生招待公演、⑤一般公演として、デフ・パペットシアター・ひとみ『はこ／BOXES じいちゃんのオルゴール♪』を上演した。これらの公演のフロントスタッフは市民サポーターが担い、さらに④は手話通訳、⑤は手話通訳と要約筆記のスタッフを地域の方へ協力を依頼した。市民サポーターが関わりながら、劇場と関わりの薄い市民へ劇場文化を繋ぐことができた。また、市民サポーターがコミュニケーション能力を向上させる研修の機会となった。

以上のように、普及啓発事業の実施が地域の文化芸術の発展につながったと考える。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

スポーツ競技のサッカーが地域の活力を生み出している。茅野から 50km 圏内にある松本市には「松本山雅 FC」があり、アルウィンスタジアムを拠点としてホームタウンを形成し、プレイヤーの育成はもとより、多くのファン活動を生み、地域アイデンティティの一つとなるとともに、経済活動の発展にも貢献している。文化芸術活動の実演芸術において、サッカー競技における「スタジアム」の役割を果たすのが「劇場・音楽堂等」であろう。劇場・音楽堂等を核とするムーブメントの活性は、地域アイデンティティとなり、「豊かな暮らし」を支え、地域未来創生の持続を担保するものとする。

茅野市民館を核とするムーブメントの活性を目指すとき、地域の中で変化していく流動的なネットワークをリサーチし、茅野市民館が核、またはハブとなり、つながっていくことが必要であろう。今回の事業の中で、これまでの事業で生まれた地域文化活動の担い手である市民サポーターとともに、これまで劇場に関わりがなかった市民を新たに招き入れることを試み、つながることができた。

ろう者への対応にあたり、手話通訳や要約筆記を地域の方に依頼をした。それぞれのネットワークに触れる機会にもなり、今後の継続的な連携と組織化の手がかりを得ることができた。バリアフリー対応については、普段からバリアフリーの仕事に携わっている地域の方に事前に情報を共有する会を設定し、学ぶ機会を設けた。

茅野市民館は PDCA サイクルの中で組織的に流動的なネットワークとつながり、そのための事業を更新し、さらにつながり、また別のネットワークとつながる。そのような終わらない変化を組織的にしていく必要があり、令和元年度の事業においても組織的が持続的に、そして発展的に事業を行えたと思う。